

国際社会学部

大川 正彦

コース／現代世界論コース

ディシプリン：政治学（原論・政治理論）



政治学原論・政治理論とは

人間にとって政治とはどのような営みか。このことは、現実の政治という営みについての観察から歴史的にも、思想的にも、さまざまに論じられてきました。政治思想史と呼ばれる学問分野でも圧倒的な量の蓄積があります。とはいえ、20世紀、そして21世紀の諸現実をふまえるなら、政治にとって人間とはいかなる存在か。このこともまた、政治学という学的営みにとっては重要な問いであるようにおもわれます。かくて、〈生存と共生〉をめぐる政治／非政治と人間とのかかわり／かかわらなさ、に足場をおきなおして、政治、そして政治学を問いなおす営みもまた、政治学原論・政治理論のど真ん中の課題なのだ、と試みてみたいとおもいます。

研究紹介

研究の名に値することをしてきたつもりもなく、そのような忍耐力・耐久力の必要な事柄から絶えず逃げて来た、というのが正直なところのようです。そんなわたしですが、かつて高校、大学のころに、出会った、読み齧ったいくつもの書物が、こんにちにいたるまで大きくはたらいっていることをこのごろ身に染みて感じます。

ひととひととの間での、呼びかけ・応答のたまさかの連鎖をとおした「共に在ること」に軸足を置いて思索するというスタイルは、大庭健『他者とは誰のことか』から自己流で学んできたものですが、その展開としては、『マルクス—いま、コミュニズムを生きるとは』（NHKブックス、2004年）があります。

さらにはご縁があつての翻訳の仕事としては、テッサ・モーリス＝鈴木『辺境から眺める—アイヌが経験する近代』のほか、畏敬する先輩・友人と、リチャード・ローティ『偶然性・アイロニー・連帯—リベラル・ユートピアの可能性』（岩波書店、2000年）を訳出もしています。

200X年代には、いわゆる戦後補償運動の現場にふれようと裁判傍聴に通い、結果として、金富子・中野敏男編『歴史と責任—「慰安婦」問題と一九九〇年代』（青弓社、2008年）への参加・寄稿というかたちをとりました。

これまでの勉強の傾向を振り返ってみるなら、生存と共生というテーマを掲げつつ、（1）悪・暴力・不正義を／から考える、（2）いのちをめぐる政治、という二つの観点に軸足を置いてきた、と、まずはいえそうです。今日ではだれも掲げたりはしない語法でいえば、「存在と所有／あることともつこと」ということになりましょうか。とはいえ、最近では、在り損なうこと、そして、喪失・剥奪、欠如といったところから、問題をとらえてみたいと感じてきているところです。

担当授業

- 「政治社会論入門：〈共に生きること〉をめぐる倫理と政治」（春学期）
- 「政治社会論入門：倫理と環境正義」（秋学期）
- 「政治理論1：ケアの倫理と政治理論」（春学期）
- 「政治理論2：森崎和江とフェミニズム」（秋学期）

関連する分野

- 哲学・倫理学

出版物

政治理論

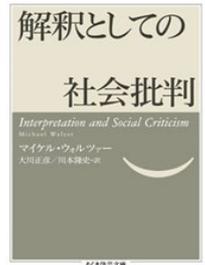
- 『思考のフロンティア—正義』岩波書店、1999年
- 『シリーズ・哲学のエッセンス：マルクス—いま、コミュニズムを生きるとは』NHKブックス、2004年

翻訳

- テッサ・モーリス＝鈴木『辺境から眺める—アイヌが経験する近代』（2001年、みすず書房；新装版、2022年、みすず書房）
- リチャード・ローティ（共訳）『偶然性・アイロニー・連帯—リベラル・ユートピアの可能性』岩波書店、2000年

国際社会学部

いのち論ゼミ



どのようなゼミか

本ゼミは、(1) 悪・暴力・不正義を／から考える、(2) いのちをめぐる政治、という二つの観点に軸足を置いて進めてきました。とてつもなく大きな括りをすれば、生存と共生の政治理論といってもよいかもしれません。むしろ、これは、あくまでもゼミの音頭取りたるわたくしの個人的な希望、切望、思い込みのたぐいであって、ゼミ生それぞれの受けとめ方(受けとめないこともふくめて)は区々あるでしょう。とはいえ、最近では、このゼミを「いのち論ゼミ」と自称し、ゼミ生たちもいつの間にかこの呼称を使ってはいるようです。

本ゼミを通じて、各人各様の「いのち論」にむかって探究をつづけていってもらうのですが、3年生の春学期には、共通テキストに取り組むようにしてきました。秋学期からはそれぞれの翌年次の卒論執筆に向けた各自の報告を中心にします。

2023年度には、キャロル・ギリガン『もうひとつの声で——心理学の理論とケアの倫理』(川本隆史・山辺恵理子・米典子訳、風行社、2022年)、森崎和江『いのちを産む』(弘文堂、1994年)をとりあげています。

ゼミ生それぞれがごじぶんにとっての「古典」「わたしの一冊」に出会い、その書を繰り返し読み、そしてかんがえた事柄をゼミの仲間につたえ、仲間からの厳しくも暖かい応答をうけとめ、また考えなおし、歩み、……ということをつづけ、それぞれの「いのち」論をかたどることばを創造＝奪還してほしい、というのが、ゼミの音頭取りの小さな願いです。「生き方にたえずあらたな靈感を与えつづけるような具体的な生成力をもった骨髄としての思想、生きられたイメージをとおして論理を展開する思想」(真木悠介『気流の鳴る音』)をわがものとされるように。

卒論 (2022年度)

- 誉め言葉に潜む悪意のない差別—
—日本におけるジェンダー及び人種に関するマイクロアグレッション—
- パレスチナ問題が内包する可能性—
—岡真理の「分有」論を手がかりに—
- 現代社会における生の苦しみについて—
—ショーペンハウアーの「意志」の視点から—
- 相容れぬノスタルジア・アイデンティティ・スティグマ
- 書評：中西嘉宏著『ロヒンギャ危機—「民族浄化」の真相』(中央公論新社〈中公新書〉、2021年)
- 丸山政治学における戦後日本の「非政治化」についての分析

おススメの本

- アリストテレス『心とは何か』(桑子敏雄訳)〈講談社学術文庫〉、講談社、1999年
- マルクス『経済学・哲学草稿』(城塚登・田中吉六訳)〈岩波文庫〉、岩波書店、1964年
- 柳田國男『明治大正史 世相篇』講談社学術文庫、1993年〔初刊は、朝日新聞社、1931年。〕
- 大庭健『いのちの倫理』ナカニシヤ出版、2012年
- 立岩真也『私的所有論 第2版』生活書院、2013年〔原著は、勁草書房、1997年刊〕
- キャロル・ギリガン『もうひとつの声で：心理学の理論とケアの倫理』(川本隆史・山辺恵理子・米典子訳)、風行社、2022年